
きみがくれた...

Fumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみがくれた…

【Nコード】

N5639A

【作者名】

Fumi

【あらすじ】

喫煙、飲酒、ケンカにsex…愛を信じられなかった男が、大切な人を見つけ、変わってく感動の物語。実話。

第一章：出会いと愛の始まり。（前書き）

合コンで知り合った2人。釣り合わない2人だが、少しずつ友達になって行った

第一章：出会いと愛の始まり。

「なあ、いいだろう？」

「少しなら…」

1人の不良が、少し体の小さな少年を脅していた。

「ラッキー！」

そう言うのと、不良は少年から、二万円を取り上げた。

不良の名前は、かまだ えいじ鎌田英二

体は小さくて、少し細身の高校二年生。見るからに、最近の不良と分かるぐらいにぐれていた。

喫煙、飲酒、また女遊びも激しかった。毎日、学校に来てはサボリ放題。ケンカもし放題。

信じるものは、金と仲間達だけだった。夜の街を、毎日のようにさまよっては、家にも帰らなかった。

「英二、今日飲みに行かねえ？」

授業中にマンガを呼んでた、英二に親友の慎太郎が話かけてきた。

「おっ！いいねえ。行こう。女の子来る？」

いつものように、誘いに乗った。

「また始まった。女がいねえと行かないのかよ。今日は、祐介の失恋パーティーだ。」

祐介というのは、英二達の連んでる仲間の1人だ。

「えっ！あいつ振られたのか？しょうがない奴だな」

こうして、今日の夜、失恋パーティー決定！

そして夜、慎太郎の家でメンバーは集まった。

英二に祐介、淳にケイと仲のいい仲間が集まり、飲んでいた。

「まっ！祐介、女は沢山いるぜ。今度、俺の友達を紹介してあげるからさ。元気出せよ」

そう言いながら、淳は祐介を励ました。

「しかし、こんないい男を振るなんてさ、女って見る目ないね」

英二は、酒を飲みながら言った。

「みんな、ありがとうな。俺のために集まってさ。俺…いい仲間を持ったよ」

そう言うのと、祐介は泣いた。

メンバーは、泣く祐介を暖かく見ていた。

そして、その日は男同士で朝まで飲む事を約束した。

「彼女かあゝ、欲しいなあ」

ケイが、独り言のように言った。

「ところでさ、この中で彼女持ちって、英二しかないよな」

慎太郎が、ふと英二を見た。

「あゝ、こいつは彼女とか興味ないって。女とかヤルだけの存在としか思ってないからな。」

そう、淳は英二を指差しながら言った。

「いいよなあゝ！モテる奴は」

「当たり前だろ。俺、かつこいいからよ」

そう言いながら、威張る英二。

みんな、英二を羨ましがりながら、酒を沢山飲ました。

いつもと同じ。大切な仲間達と過ごしてる時間が何より、英二は好きだった。

ある日、英二はいつものように、仲間達と授業をサボってた。

急に、たまり場のドアが勢いよく開いた。

「ビッグニュース！ビッグニュース！」

そう、慌てながら入って来たのは、淳だった。

「うるせえなあ。今、麻雀してんだよ。静かにしろ。」

英二は、淳を睨んだ。

「じゃあ、いいんだ。英二は行かないんだね。」

少し、自慢気に淳は言った。

「何だよ？」

麻雀を止め、淳の話しを聞く事にした。

「実は、隣の高校と合コンの約束をして来ました〜！」
と、Vサインをする淳。

「隣の高校って、あの星藍高校か？女子校の女の子か？」
と、英二は興奮して聞いた。

「あゝ、中学の時のクラスの子だけだよ。出会いが欲しくて、俺に連絡して来たんだ」

「ハイハイ！俺行きたい！」

真っ先に英二は、手を挙げた。

「まあまあ、みんなで行こうよ。向こうは何人来るか知らないけどさ。」

そう言うのと、みんな喜んだ。

次の休みの日、合コンの場所へ英二達は早めに来ていた。

「久しぶりに、女と遊べるぞ」

英二は浮かれていた。

「でも…英二いいのか？彼女は…」

祐介が聞いた。

「別れたから、平気」

当たり前のように英二は、さらっと言った。

「ちえっ。いいよな。女と別れても普通な奴。」

英二は、女"s e x"としか思ってた。なかつた。

そんな話しをしてる内に、女の子達が来た。

今時の女の子という感じの子が4人。

英二は目を輝かせた。

ふと、一番右を見ると、一番おとなしそうで普通の子が座ってた。
(この子とは、うまく行かないな)

そう思いながら、合コンを始めた。

それぞれ、自己紹介をし、英二は一番話しやすい『弥生』という子と仲良くなった。

みんな、ペアになって楽しい時を過ごした。

ふと、英二は祐介を見ると、さっきの普通の子と楽しく喋ってた。最近、振られてから元気が無かった祐介だが、今日は楽しそうで、英二は嬉しかった。

そして、合コンもお開きにしようとした時、弥生が話しかけて来た。

「英二君、また飲もうね。これ、ケイ番」

と言って、ケータイを見せた。お互いに、番号を交換し、また会う約束をした。

合コンから二週間経った。

あの日から、英二達は弥生達と連絡を取り、たまに飲んだりしていた。

相変わらず、学校を抜け、たまり場に行こうとした時、隣の星藍高校から弥生の声がした。

「またサボリ？本当にバカになるよ」

と、英二達に手を振っていた。

「今日もたまり場来いよ。」

と英二は誘った。

「うん。明日香と2人で来るよ」

明日香というのは、一番右にいた普通の子だ。祐介と仲が良く、実は祐介の事が好きらしい。

そのことは、祐介以外みんな知っていた。

たまり場で、英二達はまた飲んでいた。明日香や弥生も来て、いつものように騒いでいた。

「ビールも無くなったし、俺パクって来るよ。」

当たり前のように、英二は席を立ち、ビールを盗みに行こうとした。その時、後ろから服を掴まれた。振り向くと、明日香が掴んだ。

「何だよ。」

ワケも分らず、ひたすら服を掴む明日香。みんな驚いていた。

「……ダメだよ。盗んじゃ。お金なら出すから盗みはダメだよ」いきなり、明日香が言った。

「はあ？」

英二は、いつも盗んでいたから、改めて盗みを止められて戸惑った。
「この子、盗みとかケンカとか嫌いだからさ」

弥生が説明した。

「んな事言われてもね」

英二は困った。

「盗みはダメ。ちゃんと買うの。明日香も一緒に行くから。ね？」

そう言われ、渋々買いに行く事にした。もちろん、明日香も一緒に街のお店は、英二達が来ると、びびって酒やタバコを提供していただから、酒を買うなんて当たり前に出来る。

明日香がお金を出し、2人でたまり場へ戻ってる頃、明日香が口を開いた。

「さっきはゴメンね。つい、言っちゃった。」

「…別に…」

英二はタイプじゃない女には冷たかった。

しばらく、沈黙が続き、ふと明日香を見ると両手で袋を持っていた。
「持つよ」

英二は明日香の袋を持った。

「あるがとう。…鎌田くんって、聞いていた話より優しいんだね」

英二は、赤面した。

「バカやろう。俺は、顔もいいし、優しいんだよ」
と照れ隠しした。

また、黙って歩くと明日香が

「ねえ、祐介君って、どんな感じ？」

と聞いてきた。

ふと足を止め、明日香を見て、ニヤニヤした。

「ふ〜ん。やっぱり好きなんだ。あいつは、いい奴だよ」

と、祐介を誉めた。

「そっかあ」

明日香は、嬉しそうな顔をしながら英二を見た。

（つたく…後で祐介にタバコ買わそう）英二達は、たまり場に着き、また飲み始めた。

英二は祐介の隣にいた。また明日香を見ると、チラチラと祐介を見ていた。

英二はたまらず、

「明日香、席変わろうぜ。弥生を口説いてみせる」と言って交代した。

「バカ英二。私を口説くなんて百年早いんだよ」

弥生は、本当の事を知らずに英二をからかった。

「おっ！言っただ。落ちたら一発やらせろよ」

弥生と英二は、いつもみたいに冗談を言い合いしていた。

その日から、少しずつ、祐介と明日香は仲良くなっていた。周りからは、付き合っていると間違われるほどに。

ある日、英二が家でテレビを久々に見ていると、ケータイが鳴った。

（誰だよ。）

そう思いつつ、出た。

「はい！英二だ。」

「ふふつ（笑）相変わらず、怖い声だね。」

誰かも分からず、英二は怒鳴りつけた。

「てめゝ誰だよ！」

「あつゴメンね。私、明日香だよ」

英二は、一瞬戸惑った。まさか、電話してくるなんて。

「何だよ。急に電話して」

「うん。弥生から番号聞いてさ。少し、相談があるんだ…」

「何だ？」

英二はめんどくさかったけど、何故か聞いてみた。

「うん。祐介君の事なんだけどさ…彼女とかいるかな？って…」

英二は、少し黙り

「あんたさあ、人に聞いても意味ねえよ。自分で聞けよ。」

「でも…そんな勇氣ないし…」

「じゃあ、あきらめろ。自分に自信持たなきゃ、これから先、誰にも相手されないぜ。そんなに、好きならよ、自信持って告ってみるよ！」

厳しい言い方だけど英二らしい言葉だった。

「そう…だよ…自信持たなきゃね。」

よし、何か勇氣出た」

「はあ？立ち直り早いな。」

英二は、（こいつ、素直だな）と思った。

「うん。英二君も、周りの人は怖いって言ってたけど、やっぱり優しいね。ありがとう」

英二は電話越しに、赤面した。

「バカやろう。俺は…」

「ハイハイ、かつこ良くて、優しい英二君でしょ？」

明日香は、英二の言葉を言った。

英二は、ふっと笑って、

「頑張れよ。ちなみに、彼女はいねえよ」

そう言うと、電話を切った。

次の週、明日香の為に飲み会が開かれた。

今日、祐介に告るつもりだ。

祐介以外みんな知っているので、協力した。

英二は、興味なさそうに、ひたすら飲んでいた。

そして、明日香が祐介といなくなった。

「これで、明日香にも春が来たかな？本当にありがとうね。みんな」
弥生は、英二達に礼を言った。

そして、明日香達が戻ってきた。

どうやら、付き合ったらしい。明日香と弥生は抱き合って喜んだ。
また、祐介は、みんなに羨ましがられて、メチャクチャにされてい

た。

英二も祐介の頭を叩きながら、明日香を見ると、笑顔でピースをしていた。

英二も、少し恥ずかしがりながらも、ピースした。

こうして、また英二達に新しいものが出来た。

第二章 恋の始まり？（前書き）

仲間から外れた弥生を助けるために、英二達はどう動くのか？

第二章 恋の始まり？

祐介と明日香が付き合って、何日が過ぎた。

英二はかなり、イライラしていた。それもそのはず、たまり場でマンガを見ていると隣からは、

「祐介君、今日ケーキ作ったんだ！食べて」

「マジで！ありがとう」

と、バカップルが、ラブラブ中だった。

「おいっ！イチヤイチヤするなら、他へ行け。
殺すぞ！」

もう、切れそうな顔で2人に怒鳴った。

「いいじゃんかよ」。英二も混ざるか？」

祐介は、英二をからかった。

「…勝手にしろ」

英二は、マンガを投げると外へ行った。「くそっ！」

英二は一人街にいた。まだイライラは止まらなかった。

何故、怒ってるのか自分でも分からなかった。

（何か、楽しい事ねえのかな？）

そう、考えていると道の反対側に弥生を見付けた。

声をかけようとしたら、弥生の後ろから男の人が来た。

2人は、仲よさそうに歩いて行った。

「ちっ。あいつも、恋かよ」

また1人で、街を歩いた。

一方、バカップルぶりを見せつけていた、明日香と祐介は、2人でまだ喋っていた。

英二は元カノ達に片っ端から電話して、ホテルへ行っていた。

二時間ぐらいが経ち、英二はたまり場へ戻った。

明日香と祐介の姿は無く、ケイと慎太郎しかいなかった。

「よお！ヒマだね。楽しい事ねえのか？」

「何もねえよ」

英二達は、ヒマなので、とりあえず再び街へ行った。狙うは、金。優等生らしい人を見つけては、かつあげしていた。

「よあし、今日の収穫は、まあまあかな？」

当たり前のように、かつあげをしてはカラオケへ行った。

カラオケを楽しんでいると、トイレから帰って来た慎太郎が

「おいっ！隣、ケンカしてるぞ。しかも、男と女」

ケンカとならば、黙っておけない英二は、真っ先に見に行った。そこで、よく見ると見た事ある制服が見えた。

「弥生！」

思わず、ドアを開けた。

「何だ？てめはよ」

ものすごい形相で、男が英二を睨んだ。

「あ…いや…」

見た目が、どっかの組の人だと感じた。

男が英二に近づこうとすると、

「こいつらは、何でもないの。」

弥生が入ってきた。男は、まだ英二を睨みつけ

「まあいい。今度邪魔したら、殺すからな」

そう言うと、部屋を出た。

ふうと、安心して弥生を見た。

「いったい、何なんだよ！」

顔にあざが出来るほど殴られていた弥生は、英二達を睨みつけ、

「何？何で入ってきたの？」

英二達は、カチンと来て、

「はあ？てめ、人が助けようとしたのによ。何だよその態度は」

「助ける？笑わせないでよ。お前らがかなうわけないだろう。あの人は、ヤクザだぞ。…余計な事しないで」

英二は、近くにあったゴミ箱を蹴ると、

「あゝそうかよ！邪魔しねえよ。」
そう言つて、カラオケ店を出た。

その日の夜。英二はベットで、弥生の事を思つてた。
(つたく…何だよ。あいつは)

女の事は、考えない英二だが弥生の事が気になっていた。

次の日、学校をサボりたまり場に行ったら、弥生以外みんな集まっていた。

「よお！どうしたんだ。みんな深刻な顔しやがつて」

英二はタバコを吹かしながら、みんなに近づいた。

「大変な事を聞いたんだ。」

慎太郎が、英二に事情を説明した。

「弥生の元カレが、(これ以上弥生に関わるな)つて、怒鳴りつけてきたんだ。すぐに弥生が来て、その場は収まつただけど…弥生、もうここには来ないなんて言つて、出てったんだ。」

みんな、仲間である弥生の事を気にしていた。

「ふゝん。まつ来ないなら来ないでいいんじゃない？」

置いてあるイスに腰掛けると、興味なさそうにケータイをいじる英二。

「ちよつと、少しは心配したら？仲間でしょ？」

明日香は、英二を睨んだ。

「はあ？あいつが抜けるつて言つたんだろ？もう、仲間じゃねえよ。」

「

冷たく、英二は返した。

「おい、マジになれよ。てめえ…心配じゃねえのかよ」

ケイも、英二を睨みつけ怒鳴った。

英二は、負けじと睨み返した。

「あ？何だ？なら、てめえらは、何か出来るのかよ？弥生が元カレに連れて行かれて、ここで、心配してよ。それで終わりじゃねえか？

俺は、心配するつもりも弥生を連れ戻すつもりもねえよ。」
みんな、凶星を言われて黙った。

険悪なムードになり、無言のまま、それぞれ、たまり場を出た。
何日か過ぎても、たまり場には英二と弥生は来なかった。

英二は、みんなと気まずいのか顔を出さなかった。

たまり場で、祐介と明日香は寂しそうにしていた。

突然、ドアが開くとケイが真っ青な顔で入ってきた。

「大変！今、俺の先輩に会ったんだけどよ。弥生の元カレ、弥生以外に女がいるみたい。」

祐介と明日香は、一瞬驚いたが、予想はしていた。

「びつくりしねえのか？」

ケイは二人を見た。

「予想はつくよ。」

二人は、ため息をついた。

「それがまだあるんだぜ。元カレは薬をやってるみたいなんだ。この分だと、弥生もやるんじゃないか？」

三人は、顔を見合わせた。

「やべえじゃん。」

同時に言つと、たまり場を出た。

急いで、弥生の家に行った。

ちよつと弥生は、出かけようとしていた。

「弥生」

ふと、後ろを見ると、祐介と明日香とケイが走ってきた。

「どうしたの？」

突然の事で、弥生は驚いた。

「弥生、話を聞いて。もう元カレとは会わないで。このままだと、弥生もヤバい事になるよ」

息を切らしながら、明日香は言った。

「そつだ。てめえゝが落ちたら、てめえゝの人生台無しだぞ？」

「ちゃんとさ、考えようよ。一緒にさ」

祐介とケイも、弥生に言った急に言われても、何の事かわからない
弥生は、思わず笑った。

「何の事？」

明日香達は、久しぶりに笑ってる弥生を見て少し安心していた。
ふと、四人は前を見ると英二が立っていた。

「英二、何してるんだ？」

「てめえらこそ、何してんだよ。俺の計画の邪魔しやがって」

四人は何の事かわからなかった。

すると、弥生のケータイに元カレから電話が来た。

「もしもし？」

「てめえの連れ、何者だよ。急に来やがって暴れてよ。とにかく、
これ以上関わりたくねえからな。」

弥生は、英二をよく見た。服もボロボロで、傷もあちこちにある。

「まさか、英二？あの人とやり合ったの？」

少し、照れながら英二は

「別に…俺はム力つく奴は潰したいからな」

四人は、以外だった。女の為には絶対に動かない英二が、見知らぬ
奴とやり合うなんて、今までなかったからである。

ジロジロと英二を見る四人。

「…何だよ！人の顔をジロジロ見やがって、さっさと行くぞ。」

照れ隠しに、一人たまり場の方向へ向かった。

そんな様子を明日香は見て、

「そっかあ、」

と一人で納得したようだった。

次の日、英二達はたまり場で飲んでいた。

相変わらず、バカッフルぶりを見せつける祐介と明日香を見て、

「おい！いい加減、離れやがれ！別れさせるぞ」

英二はイライラしていた。

「何だよ！英二も作ればいいじゃんかよ。したら、ラブラブ出来るぞ？」

祐介は、からかうように言った。

「英二君は、好きな子がいるもんね〜！」

明日香の一言に、周りは驚いた。

「は？誰だよ。好きな奴は」

英二は、明日香に聞いてみた。

「ほら、今戻って来るよ」

と、みんな一斉にドアの方を見ると

「ん？どうしたの？」

弥生が立っていた。明日香以外は、思わず大笑いをした。

「ありえねえ〜。こんなブス」

英二は笑いながら、言った。

「誰がブスだって？てめえ〜殺してやる」

そう言っていると、弥生は英二を追いかけ回した。逃げ回る英二を見て、

「やっぱり！」

と、明日香はまた一人で納得した。

英二と弥生は、楽しそうに走り回っていた。

第三章 気づかない気持ち（前書き）

英二が好きになるのは誰なのか？祐介と明日香は？

第三章 気づかない気持ち

英二達と弥生達が出会って、3ヶ月が過ぎた。

相変わらず、祐介と明日香は、ため息が出るほどバカップルだった。

英二は、あきれて何も言えない様子だった。

「ねえ、今度さみんな遊びに行こうよ」

明日香が提案した。

「いいね。じゃあさ、隣町の遊園地に行こうよ。」

弥生も乗り気で言った。

英二は、聞かないフリをしていたが無理やりメンバーに入っていた。

「ごめん。俺は行けないや。どうせならWデートして来いよ。」

ケイは、明日香と祐介、またいいムードになった、英二と弥生に氣遣い断った。

今度の日曜日、祐介と明日香、英二と弥生の四人で行く事になった。

遊園地に着くと、やはり親子連れやカップルだらけで、英二はつまらなさそうだった。

祐介達は、英二に気づかずに、はしゃぎまわった。

（どっか、目を盗んで行こう）

英二はそう思い、三人から離れた。

タバコを付け、出口に向かっていると、目の前に明日香が現れた。

「何だよ！急に出てきやがって！」

「帰るの？せつかく来たのにさ。」

相変わらず、英二にとっては苦手なタイプだ。

「ガラじゃねえからな！こんな所に来て、おもしろくねえよ」

英二は、明日香をどけて歩いた。

すると、急に手を掴まれて、

「じゃあ、楽しみ方を教えてあげるよ」

英二に何も言わず、無理やり手を引っ張り出した！

「おい！祐介はいいのかよ？」

「平気。今頃、弥生とゲームで対決してるからさ」

そう言うと、英二の手を握りながら、色んな乗り物に案内した。

英二にとっては、迷惑そうだったが、だんだん慣れて来て、一緒に楽しむようになった。

二時間ぐらい二人だけで遊び、最後に観覧車に乗った。

「すごいね！祐介見えるかな？」

観覧車の外を見て、祐介を探す明日香。それを見た英二は、

「重症だな！好きになりすぎなんだよ」

と、冷たく言った。

「好きだよ。」

急に、明日香は真剣な顔になり言った。一瞬、英二は赤くなった。

「祐介の事。でも、不安な部分もあるの」

自分じゃなくて、祐介の事だったのか。英二は、静かに聞いた。

「最近さ、祐介、かまってくれないんだ。たまり場に行くと、いつもの祐介なんだけど、2人つきりになる事が全然なくて…もしかしたら…他に好きな子でも、いるのかな？って不安だよ。」

少し、涙目になりながら明日香は言った。

「バカバカしい！あいつに限って、んな事あるかよ」

しばらく、明日香は黙って、

「そうだよね。あるわけないよね？」

そう笑った。

観覧車を降りて、祐介達と合流して英二は、帰った。

その夜、部屋のベッドで英二は明日香の言葉を思い出していた。（よし！この優しい英二様がひと肌脱ぐか！）

次の日、英二は明日香に、祐介が待ってるからと近くの公園へ行くように言った。

祐介には、昨日の明日香の言葉を言って、公園へ行くように言った。

夕方になり、（今頃デートしてるかな？）と思いつつ、英二はたまり場へ行った。

たまり場には、ケイと慎太郎しかいなかった。

「祐介達は、デートか？」

知ってるくせに知らないフリをして聞いた。

「ううん。明日香は知らねえけど、祐介は飲み会だつて。」

英二は、驚いた。

「は？」

「いいよなあ！祐介さ、この前知り合った子と飲み会なんてよ。まさか、あいつが二股とかな。」

英二は、耳を疑った。

時計を見ると、待ち合わせの時間から三時間たっていた。雨も降り始めた。

急いで、祐介に電話してみると、

「もしもし、英二も来いよ！女の子沢山いるぞ」

酔ってテンションの高まった祐介が出た。

「てめえ、待ち合わせはどうした？」

「ん？忘れてた。もういないんじゃないか？」

かなり酔ってんのか、本気で言ってるのか、わからない祐介に英二はムカついた。

「てめえ、今度会ったら殺す」

そう言っていると、電話を切り、傘を持ち雨の中を走った。

あまりにも、すごい形相だったので、慎太郎とケイは立ち尽くしていた！

その頃、明日香はまだ公園にいた。

トイレの前で雨宿りをしながら、震えていた。

バシャバシャと音がしたので、（もしかしたら…）と思い、振り向くと、祐介じゃなく以外に英二だった。

「英二君？どうしたの？」

息を切らしながら、英二は

「今、祐介から電話があつて、今日来れないんだとよ」

英二は、明日香を傷つけないためにウソをついた。

「…やっぱりだね！いつも来れないんだ。まっいつか！」

一生懸命に笑つてる明日香を見て、英二はドキドキした。

「ったく…来れないならさ呼ぶなっつーの」

英二は、傘を明日香に渡しながら言った。

少し、明日香の肩が震えているのに気づいた。

その瞬間、明日香は英二にもたれるように泣き出した

「おい！大丈夫なのか？」

ただ泣きじやくる明日香を見て、英二はしばらく黙つて、そつと抱きしめた。

雨の音だけが、二人を包んだ。

しばらくすると、明日香は英二からゆっくり離れ、

「ごめんね。落ち着いた」

と言つて、英二にピースをした。

そして、二人は沈黙のまま雨が止むのを待ち、それぞれの家に帰った。

英二は、シャワーを浴びながら、ついさっきの出来事を思い出していた。

初めてだ。英二は自分の中の何かが変わっていくことに気づき始めていた。

それから、3日たち、祐介が二股してる事がバレて明日香と祐介は別れた。

「ごめん。みんな。俺のせいだ。これからは俺がたまり場には来ないようにするよ」

そう言つと、祐介はたまり場を出て行こうとした。

「おい！」

祐介を呼ぶと英二は、思いつきり殴った。

突然の事で、その場にいた明日香達は驚いた。

「これ以上、傷つけたら、俺が許さねー。」

周りは、更に驚き黙った。

祐介は、黙りつつたまり場を出た。

「何で英二がきれているんだ？」

「さあ？」

慎太郎とケイは顔を見合わせた。

英二は、気づかない内に明日香を好きになっていた。

周りもまだ、その事に気づいてない様子だった。

それからと言うものの、たまり場には祐介以外はいつものメンバーが集まるようになった。

明日香も元気になり、祐介の事は忘れていた。

英二は、自分の気持ちに気づかずに毎日を過ごしていた。

第四章 初めての気持ち（前書き）

英二は自分の気持ちに気付いた。夢で終わるか？現実に来るか？

第四章 初めての気持ち

季節は巡り、4月。高校三年になった英二達は、たまり場で進級のお祝いをしていた。

弥生にケイ、慎太郎に淳、そして明日香とメンバーが集まり、楽しく飲んでいた。ただひとりを残しては…

「おいおい、そんな落ち込むなよ！」

「そうだよ。みんな変わらないよ。」

みんなが慰めているのは、奥で一人で飲んでる英二だった。

「うつせえよ！俺は…」

「別にいいじゃん！ダブってもさ」

英二を必死に慰めていた。

そう、英二は出席日数が足りなく、もう一度二年生をすることになったのである。

「ちくしょう！もう暴れてやる」

かなりシヨックだったみたいで、さっきから一人で飲み続けていた。

「でも、すごいじゃん。タブってもさ、生徒会長なんだよ」

そう！何と、罰ゲームで負けた英二は、生徒会長に立候補し、見事当選したのである。

「そうそう、めったにいないよ。ダブリで、金髪でケンカ好きで女しか興味ない生徒会長はさ」

淳が英二の肩に手を置きながら、言った。

「てんめえ、バカにしてんのか、誉めてんのか、はつきりしろ」

そう言っつて、淳にプロレス技を駆け出した。

英二は、変わらない仲間と過ごす時間が何より好きだった。そんなある日、英二は生徒会の仕事で遅くまで学校にいた。

「ったく、まだ終わんねえのかよ」

そう愚痴をこぼしながら、山積みになった紙を片付けていた。

もう、生徒は残っておらず英二しかいなかった。

ケータイを見ると、着信が残ってた。

着信：祐介

（珍しいな）

明日香と別れた祐介は、英二達とは離れたものの、英二とは普通に接していた。とりあえず電話を試してみた。

「祐介か？どうしたんだ？」

「英二、今大丈夫か？話があるんだけど…」

少し、暗い声で返ってきた。

二人は、一時間後に居酒屋で待ち合わせした。

居酒屋といっても、英二達の先輩が経営してる所で、落ち着いて飲める場所だ。奥の座席に向かい合わせて座ると、英二は切り出した。

「で？話って？面倒な事はイヤだぞ？」

「いや…俺さ、明日香と別れて、色々考えたんだ。何でこんな事したのかさ。毎日明日香の事だけを考えてさ。いつの間にか、本当の気持ちに気付いたんだ。明日香が好きだってさ。悔やんでも無理かもしれないのにさ。」

英二は戸惑った。祐介の浮気で、明日香がどれだけ傷ついたのか知ってるからだ。

「お前は、どうしたいんだ？」

祐介を見ると、

「出来れば戻りたい。今度こそは、大切にする。」

そう真剣な目で言った。

少し、沈黙が続く。英二は再び祐介と明日香を結べようと思った。

その夜、英二は明日香に電話した。

「もっし？英二君？どうしたの？」

いつもなら、すらすらと話せるのに、この日は違った。

「あ…いや…お前よ、祐介の事まだ好きか？」

自分の言葉に辛く胸が痛んだ。

「何で？」

しばらく黙り、英二は祐介の気持ちを明日香に言った。

明日香は、黙った。

「勝手かもしれないけどよ。もう一度信じてみるよ」

英二は必死に明日香に祐介を進めた。

「何で英二君が言うの？英二君は、どうした方がいいと思う？」

胸の鼓動が早くなった。言葉が出て来ない。

「英二君？」

黙ってた英二は、

「祐介よ、お前の事めっちゃ好きなんだ。俺としては、応援するよ。

祐介は友達だしさ。…お前もよ」

何故か、汗が出てきた。人をくつつけるのが苦しいのは、英二にとつては初めてだったのだ。

「…意味わかんない。だから、何で英二君が言うのよ。バカみたい」
明日香は、怒ったような口調で言った。

「バカとは何だよ！いい加減に付き合えよ。祐介の気持ちも大切にしろ！」

なぜ、怒ってんのかわからず、怒鳴り散らした。

「そっちこそ、人の気持ちとかわかるの？そんなに偉い人間なんだ。」

明日香も負けじと言い返した。

「あつそ、じゃあてめえは、一生気持ちがあやふやなままでいろ！」

「そっちこそ、意味なく電話で切れないでよ！そういう態度だから、たぶっちゃうんだよ」

明日香と英二は、いつの間にか言い合いをして電話を切った。

一人でイライラしながら、英二はベッドで寝ていた。

（何だよ！あいつ…）

次の日、たまり場で明日香と英二は顔を合わせた。だが、口は聞かなかった。

「明日香、これから買い物付き合って」

何も事情を知らない弥生が言った。

「ごめん。今日、少し用事があるからさ。」

明日香は、申し訳なさそうに断った。

「ん？さては男だな？」

バツと明日香の顔が赤くなった。

それを見た英二は、近くにあったイスを蹴ると、外へ出ていった。

「最近のアイツ荒れちゃってねえか？」

ケイと慎太郎は英二の態度に違和感を持っていた。

それから、3日たっても、英二はたまり場には来なかった。噂では、毎晩飲み続けて女と遊んでるらしい。まっいつもの英二の生活だ。

慎太郎達は、気にしないでいた。

明日香と祐介の事は、みんな知らされていた。反対をしていた弥生もたまり場には来なかった。

さらに、一週間が過ぎた夜。久しぶりにたまり場にメンバーは集まった。だが、祐介と明日香、そして連絡さえ取れない英二はいなかった。慎太郎達は、少し寂しそうにしていた。突然、淳のケータイが鳴った。

「もしもし？先輩？お久しぶりです。えっ？英二が？すみません！今、迎えに来ます」

電話の相手は、居酒屋を経営してる先輩からだった。毎日、お店に来ては酔いつぶれてる英二を引き取ってくれという電話だった。

淳は英二を迎え、ひとまずたまり場に戻ってきた。

寝かしつけると、淳達は

「ったく、何で、こんなになるまで飲んでんだよ！」

愚痴をこぼすと、弥生はそつと、英二を見た。

「やっぱり、好きだったんだ。」

慎太郎と淳とケイは弥生を見た。

「女のカンだけどさ、英二は明日香が好きだと思う。」

三人は、驚いた。まさか、英二が恋？女はsexとしか考えない奴が？

そう思うと、思わず爆笑しあった。

その声で、英二は目を覚ました。

「てめえくらゐ、うるせえぞ！」

そして再び、眠り始めた。

淳達は、笑うのを止め、英二をよく見た。所々に傷がある。たぶんケンカだろう。

その傷を見て、

「でも、初めて見るな。こんな情けない英二は。案外、マジかもな。祐介の二股がわかった時、真っ先に祐介を殴ったのは、コイツだしさ。」

メンバーは、英二の気持ちに気付いた。

でも、その事は口にしなかった。

しばらくして、英二は起きた。

「あつたま痛つてえ！水をくれ」

弥生は、持っていたお茶を英二に渡した。

「大丈夫？」

英二は、お茶を飲むと何かを思い出したように黙った。

淳達は、何も言わずに、英二に酒を出した。

「まっ飲めよ！飲んでさ、忘れるよ。たまにはよ、弱い鎌田英二も、かつこいいぜ」

そう慎太郎は言った。

英二は、何故か涙が出た。メンバーにきづかれないように、後ろを向き酒を一気飲みした。

初めて気付いた気持ち。もう届かない気持ち。

英二は初めて人を本気に好きになった事に気付いた。朝まで飲み明かした、英二達は、そろって学校を休んだ。

次の日、英二は一人で街に行った。まだ、気持ちに整理がついてないらしく、ただ歩くだけしていた。

いつもの裏道に行くと、四、五人ぐらいの別の高校の奴がたまっていた。

無視しようとしたら、

「おい！てめえくらゐ昨日の奴だな？」

急に囲まれた。

よく見ると、一人は昨日かつあげした奴だった。

英二に仕返ししようと思伏せしていたのだ。

「あ？だから何だよ？やんのか？」

そう言つと、英二は目の前にいた奴を殴りつけた。

だが、一人の英二になうわけなく袋叩きにあつてた。

「おまわりさん。こっちです」

遠くから警察を呼ぶ声がして、英二以外は逃げ出した。

英二は、地面に倒れ、声のする方を見た。

「明日香？」

立っていたのは明日香だった。

「さつき見かけてさ。無我夢中でウソついちゃった。」

ハンカチを出し、英二の傷に当てた。

急に、英二は明日香の手を払い

「余計な事すんじゃないよ。」

冷たく、言った。

明日香は下を向き、黙った。

「さつさと行けよ！彼氏が待ってるぞ。」

英二は傷ついた体を起こした。

「でも…ほっとけないじゃん。傷だらけだよ？」

心配する明日香を見て、

「てめえには、関係ねえよ！」

「あるよ！私は…」

何かを言いかけた明日香は、また下を向いた。

英二は、その様子を見て、急に壁に明日香を押し付けた。

「私は？何だ？好きなのか？俺の事！じゃあ嬉しい事してやるよ」

そう言つて、無理やりキスをした。

明日香は、英二を突き飛ばし、涙目になりながら

「さいつてい」

そう言つと走つて行つた。

英二は、自分がわからなくなっていた。近くにあったゴミ箱を蹴ると、上を向き叫び続けた。

まるで気持ちを殺そうとするかのように。

英二は、一人たまり場にいた。

先ほどの出来事を悩んでいた。

なぜ、あんな事したんだろう。答えはなかった。

「くそ！」

そばにある雑誌を投げつけた。

「荒れてんな」

声ができる方向を見ると、祐介がいた。

「何だよ！わりいかよ。」

「別に…」

二人は黙った。

英二は複雑な気持ちだった。好きな奴の彼氏と一緒にいるのが苦しかった。

祐介は、ゆっくり英二に近づくと、

「あのよ…さつき明日香が来た。明後日、引っ越すんだとよ。場所はわからないけどよ」

英二は驚いたが、何も言えなかった。

「いいのかよ？」

祐介に聞くと、ふつと笑って、

「俺も一緒に行くよ。ちゃんと彼氏としてな」

胸がしめつけられた。

黙って、たまり場を出ようとする

「逃げんのかよ！俺は知ってるんだぜ。英二が明日香を好きな事」

英二は、立ち止まり

「ばかじゃねえか？俺はsexしか興味ねえよ！」

と言って、出ていった。

2日後、英二達の高校と弥生達の高校は、合同で生徒総会で体育館に集まっていた。

この日、祐介と明日香は休んでる。引越すためだった。

「見送り行きなよ。」

弥生は英二に言うが、

「馬鹿やろう！俺は今日生徒会長として、挨拶があるんだよ。んな事で行けるかよ！」

いつもなら、サボる英二だが、今日は真面目に出ていた。たぶん、何かをしてなきゃ落ち着かなかったんだろう。

先生方からも、（今日1日だけは真面目な生徒でいてくれ）と頼まれていたからだ。

生徒総会は順調に過ぎて行き、英二が挨拶する時間になった。

アナウンサー

「続きまして、輪等高校 生徒会長 鎌田英二さんおねがいます」
ビシッと制服を着けた英二が出て来た。

挨拶を始めようとすると、体育館のドアが勢いよく開いた。私服姿の祐介が息を切らし立っていた。

会場はざわめき始めた。

「祐介！」

弥生達も立ち上がり祐介を見た。

祐介は英二のもとに歩きながら、

「てめえ、何してんだよ？もうすぐ行っちまうんだぞ！」

こんな事してる場合か？」

英二は何を言っているのかわかった。

だから、黙っていた。

先生方に捕まれながら、祐介は叫んだ。

「明日香は、お前が好きなんだよ！俺は、振られたんだ！お前は、どうなんだよ？英二！」

英二は、立ち尽くした。

祐介は、そのまま外に出された。

「え、ハプニングがありました！が挨拶を続けてください」
司会の人が言うと、英二は続けた。

「俺は、見た目は悪い。はっきり言って、会長とか似合わないと思う。でも、なったからには、しっかり最後までしようと決めたんだ。」

会場は、またざわめき始めた。

「俺…でも、もつと大切なものがあると気付いたんだ。ケンカしかなかった俺でも。女はsexする事しか愛せなかった俺でも。こんなに人を好きになったんだ。初めてなんだ…だから、ごめん。会長の仕事より大切なものがあるんだ」

そう言くと、舞台から降りた。

先生方は止めに入ったが、慎太郎やケイが間に入った。

「早く行け。」

英二は走った。まだ間に合う。そう思い、明日香の家に向かった。

明日香の家に着くと、ちょうど明日香は荷物を積んでいた。

「英二君？」

息を切らし、明日香の前に立ち、英二は気持ちを伝えた。

「俺…お前が、どんなに遠くに行っても、変わらないから！ずっと好きでいるから。初めてなんだ。人を本気で好きになった事。」

明日香は、突然の事で驚いた。

しばらくして、英二の姿を見て笑った。

「何？その格好！英二君じゃないみたい。」

英二は自分の真面目な姿を見て恥ずかしがった。

「ドラマみたいだね。」英二は、明日香を見つめた！

「でも、英二君何か勘違いしてないかな？」

「は？」

「引越して言っても、すぐそこだよ。新築建てたんだ」
そう言いながら、少し離れた新しい家を指した。

「は？」

まだ状況がつかめない英二は、固まった。

「まっ！いつか。荷物運ぶのを手伝ってよ。」

英二は自分が恥ずかしくなって、

「馬鹿やろう！何で俺が…」

英二の言葉をかき消すように

「可愛い彼女の言うことが聞けないの？」

と、明日香はからかった。

英二は顔を赤くしながらも、何も言わずに荷物を車に運び始めた。荷物を運び終え、学校に二人で戻ると弥生や祐介、慎太郎にケイ、淳といったものメンバーが待っていた。

「ったく、世話がかせんなよ！」

「こんなドラマ見たことあるよ」

と、明日香と英二を祝福した。

この後、それぞれ、先生方に怒られたのは間違いない。

第五章：子供

明日香と付き合って、3ヶ月！

毎日が楽しくて、英二は、女遊びもケンカも止めていた。周りは、その変化ぶりに驚いたが今の英二が好きだった。

たまり場には、いつものメンバーで賑わっていた。

そんなある日。

いつものように、たまり場へ来ていた英二達は、今の状況が掴めてなかった。

「ぼーぜんと立ち尽くす英二と淳と慎太郎とケイ。

目の前には、1人の女性がいる。

何やら、ものすごい形相で英二達を睨みつけている。

「あのー、何でしょうか？」

ケイが恐る恐る聞いてみた。

女性は、しばらく英二達を睨み続けると、

「噂で聞いていた通りね。人間のクズだわ」

思いもよらない言葉が帰ってきた。

英二は、聞くと同時に

「何だと？いきなり入って来て、ケンカ売ってんのか？」

と、女性の前に出た。

それでも、怯まず女性は

「すぐに暴力に走り、未成年者のくせに喫煙、飲酒、その上淫らな男女関係。近所でも有名な鎌田英二……はつきり言って、犬以下ねえ。」

と、英二に薄ら笑いで言い返した。

さすがに、切れる目の英二は更に、前に出て睨みつけた。その時、たまり場のドアが勢いよく開き、弥生と明日香が入ってきた。

「お母さん！」

英二達は耳を疑った。

「弥生ちゃん。ダメですよ。こんな所へ来ちゃ。」

何と、英二達をさんざん言った女性は、弥生の母親だった。

「何でここににいるの？仕事じゃないの？」

弥生は、少し戸惑いながら聞いた。

「あなたの噂を聞いてね。こんなゴミ箱みたいところへ出入りしてるって聞いたからさ。」

さっ、帰りましょう。いつまでも、こんな場所にいたら、死んでしまうわ。」英二は切れた。

「おい！弥生の母親だか知らねーけど、言っていいことと悪い事があるだろう。」

それを無視して、弥生の母親は弥生を連れて出ていった。

そばにあったイスを蹴ると英二は、

「あゝ！何なんだよ。弥生の母親だからって……ムカつく」

イライラが収まらない英二を見て、明日香は

「しょうがないよ。弥生のお母さん、議員だもん。自分の子供が、悪い道に行ったら恥ずかしいんじゃない？」

全員黙った。それは当たり前な事だったからだ。

何日か過ぎ、あの日以来弥生は、たまり場に来てなかった。母親が行かさないのだろう。そんなある日に、事件が起きた。

英二達が学校にいと、英二のケータイが鳴った。

着信：明日香

「おう。どうしたんだ？」

「どうしたじゃないよ。大変だよ。弥生が学校辞めたのよ。」

電話の声は周りにいたケイ達にも聞こえた。

すぐに学校をでて、明日香と合流した英二達は、弥生の家へと向か

った。

チャイムを鳴らすと母親が出て来た。

「何の用？」

「弥生が学校辞めたって聞いて来たんです。弥生と話させてください。」

明日香は、必死に言った。

弥生の母親は、明日香だけを見て、

「明日香ちゃんだけ入って。」

英二は、また切れた。

「俺たちはダメなのかよ。俺たちも仲間なんだよ」

「あなた達みたいない人と付き合ってるから、こんな事になったのよ。早く帰りなさい」

訳も分からず、英二達は追い返された。しばらくして、明日香がたまり場に戻ってきた。

「どうだった？」

英二は聞いてみた。しばらく黙って、明日香は、深刻な顔をして

「…弥生さ、妊娠してるんだって…」

その言葉を聞いたとたんに、英二達は驚いた。

「誰の子？まさか、あの元カレ？」

明日香は、静かにうなずいた。

「元カレの方と、連絡が取れないみたい。弥生のお母さんは、降ろすように言っていてさ。だから、学校辞めさしたんだって」

英二は、だんだん怒りが込み上がってきた。

（妊娠したからって、弥生の気持ちはどうするんだ）

そう思うと、無意識に、弥生の家へ向かった。その後に続き、ケイや慎太郎、淳と明日香も向かった息を切らしながら、弥生の家に着くと、チャイムを鳴らした。

やはり、弥生じゃなく母親が出て来た。

「また来たの？あまり、しつこくすると警察呼ぶよ」

英二は、今度は怒らずに深々と頭を下げながら言った。

「お願いします。弥生と話をさせてください」

「もう、あの子とは関わらないで！」

そう、言つと母親はドアを閉めようとした。

「待つてよ！」

明日香が、止めた。

「私なら入らせてください」

そう言つと、家の中に入つて行つた。

英二と慎太郎と淳は、ずっと家の外で待つていた。

弥生の部屋の前で、明日香はゆっくりノックした。

「弥生？明日香だよ。部屋にばかり入つてないでさ、外に出てきて」

弥生は黙つていた。

明日香は、ドアの前に座ると、ゆっくりと喋り出した。

「弥生、覚えてる？小学校の時に初めて会つた時の事……」

部屋の中で、弥生は静かに聞いていた。

「初めてさ、会つた時私泣いていたね。何で泣いていたのかは、忘れちゃったけど弥生が急に現れて、アメ玉くれたよね。」

ただ、もらったただけなのに涙が止まつてさ、それから2人でいつも一緒にいたっけ？

怒られる時も一緒。笑う時も一緒だったね。そして、一緒に成長してさ、今もこうやって喋つていてさ。何か不思議だよね！

それから、英二や淳や慎太郎達に会つて。また楽しい事増えて来たね。

これからも、楽しくなるよ。

夏になったらさ、みんなで花火しようよ。河原でさ、沢山買ってき
て。また、英二がバカな事するんだろうね。川に飛び込んだり。あ
いつは本当にバカだからね。

そして、冬にはクリスマスパーティーしてさ。雪降るかな？今年。
これからさ、忙しくなるね。

あつ！夏に向けて水着買いに行こっか？弥生も欲しいって言ってた
じゃん。楽しみだね。」

明日香が独り言のように喋っていると、ドアが開き、弥生が出て来
た。

涙を流しながら。

明日香は、ゆっくり弥生を抱きしめた。

「またさ、みんなで笑ってしようよ。弥生の気持ちを全部出してよ。
何度でも、私は言うよ？弥生は一人じゃないってさ。」

明日香の胸で、弥生は泣きじゃくった。一方、外の方では英二達が
母親を説得していた。

「早く帰ってちょうだい。警察呼ぶよ」

相変わらず、英二達をイヤな目で見ていた。

その時、ドアが開き明日香と弥生が出て来た。

英二達は、弥生の姿を見ると安心した顔になった。

「弥生ちゃん。ダメですよ。外に出て来ちゃ。」

弥生を中に連れ戻そうと母親は、弥生の手を掴んだ。

その手を振りほどき弥生は言った。

「お母さん。ゴメンナサイ。私：産みたいの」

母親は驚いた顔をした。

「何言ってるの？あなたはまだ、子供なのよ？しかも、父親もいな
い子供なんて恥ずかしいじゃない」

それでも、弥生は首を横に振り、英二達の前に行った。

「弥生ちゃん！お母さんの言うことを聞きなさい」

そう言っ、弥生の顔をビンタしようとした。

寸前の所で、明日香が間に入り、母親のビンタは明日香に当たった。

「！！明日香」

英二はすぐに、近寄り明日香を見た。明日香は、顔が赤くなってるだけだった。

「弥生ちゃん。これ以上、お母さんを恥ずかしがらせないで」

その言葉を聞くと、英二は切れた。

「おい！てめえ、バカじゃねえか？自分の子供の気持ちもわからねえで、自分自身の心配ばかりしやがって。

母親じゃねえかよ。

じゃあ、てめえ誰だよ？

誰が、弥生のおしめ変えた？誰がミルクあげた？

弥生が、風邪引いたら誰が、そばにいた？弥生が、一番笑顔を出した相手は誰だよ？

てめえ誰だよ？てめえ誰だよ？

てめえは、母親だろうが！」

あまりにも、でかい声で切れてる英二に誰も何も言えなかった。

少し、涙目の母親は下を向き黙ってた。

「お母さん。お願い。私…産みたいの。お母さんとこの子と一緒にいたい」

涙を流しながら弥生は言った。

少し弥生を見つめ、母親は弥生の頭をなで始めた。

「心配なのよ。あなたも私と一緒にいたいな人生送るんじゃないか？
って。」

すると、慎太郎や淳、明日香も前に出て来て言った。

「大丈夫です。私たちがいます。これからも全力で弥生も子供も守ります。」

母親は、少し英二達を見つめながら、笑顔を出した。

「初めてだね。弥生ちゃんが私に、刃向かうこと。

こんなにいい友達がいたなんてさ。

弥生を見守ってください。」

そうして、頭を下げた。

「じゃあ、産んでもいいの？」

弥生は恐る恐る聞いた。

母親は何も言わずに、家に入ろうとして、後ろを向きながら言った
「早く、準備をしなさい。今日は、お祝いするよ。初孫が出来たからね」

英二達は、見つめ合って喜んだ。

その夜、弥生の家で遊びまくり、かなり夜遅くになったので、英二は明日香を近くまで送る事にした。

「弥生、嬉しそうな顔してたね。」

明日香は一步前に出て、笑顔で言った。英二は、それを見て、微笑んでいた。

急に明日香が隣に来て、英二の手をにぎり、笑顔で言った。

「私も、子供欲しいな。」

一瞬にして、英二の顔は赤くなり、照れながら

「馬鹿やろう！」

と横を向いた。

二人は、手を握り合いながら、夜の道を歩き続けた。

幸せな顔をしながら…

第六章 過去

またいつもの毎日が過ぎていく。

弥生の子供も、お腹の中で順調に育っている。

英二達は、まだかまだかと待ち遠しくて、しかたがなかった。

ある日の出来事だった。いつものように、英二は明日香と学校に行き、真面目ではなかったが、授業は出ていた。

明日香が、心配するからだ。

相変わらず、お互いぞつこんなバカップルだ。

授業が始まり、後ろの席で英二は、マンガを読んでいた。

「今日は、臨時の先生を紹介するぞ」

担任の先生が、少し自慢気に話した。

しばらくして、臨時の教師は教室に入ってきた。若くて、顔もいい。

また、背も高くて、女にとっては理想的な男性だ。

入ってきた途端に、クラスの女は騒いだ。

男からしても、文句のつけどころがない程だった。

しかし、自分が一番だと思ってる英二は、気にしなかった。

「えー、今日からしばらく、このクラスを受けます、『鎌田伸二』

と言います。教科は、体育です。よろしくお願いします」

爽やかに挨拶をすると、クラス全員拍手した。

突然、後ろの席に座ってた英二が立ち上がった。

「まさか…何で、てめえが…」

クラス全員、英二をみた。

英二は、伸二を見て驚いていた。

わずかに体が震えていた。

ホームルームが終わり、慎太郎と淳は英二の所へ遊びに来た。

「どうしたんだ？青い顔をして」まだ、震えてる英二を見て、いつもとは違う何かを感じていた。

「悪い。気分が悪いから帰るわ。」
そのまま、英二は家に帰った。

たまり場に行っても、英二の姿はなかった。
明日香にも事情を説明して連絡したが、（また今度話す。）と、言っただけだった。

次の日、英二は学校に来て、一言も話をしなかった。
臨時の伸二先生は、生徒に人気が出て、順調な教師ぶりをしていた。
その日の放課後、慎太郎と淳は、たまり場へ行こうと校門の前を通った。

誰かの声がして、近くの木の下を見ると、英二と伸二先生がいた。
二人は、知り合いだったみたいだ。声をかけようとしたら、突然、英二が伸二の胸ぐらを掴んだ。

とっさに慎太郎と淳は止めに入った。

慎太郎が間に入り、淳は英二を止めた。普通なら、ケンカに参加するが、相手は教師だ。暴力を振るうと、退学になるかもしれない。
淳が必死に止めても、英二はまだ、すごい形相で睨みつけてる。

「何してんだよ？」

慎太郎は、英二に聞いても、答えは出てこなかった。

「何でもないよ。なあ、鎌田英二君」

不気味に笑いながら、伸二は去っていった。

ワケも分からず、慎太郎と淳は、英二を連れて、たまり場へ行った。
「いったいどうした？らしくないぜ？」

「そうだよ。英二何があつたんだよ？」

慎太郎と淳は、英二に聞いても黙ったままだった。

明日香と弥生も心配そうに見ていた。

しばらく黙り、静かに英二は口を開いた。

「あいつは、俺の義理の兄だ。」

全員驚いた。英二に兄弟がいたなんて。家の事は一切話さなかった

英二が、今話そうとしてる。

静かに聞いた。

すると、突然、たまり場のドアが開いた。

現れたのは、伸二だ。ゆっくり近づいて来た。

「困るなあ。生徒がこんな所で悪い遊びしてたら。しかも、生徒会長も一緒だとはね。」

英二は、また伸二を睨みつけた。

「何しに来た？てめえとは関係なくなったんじゃねえのかよ」

伸二は、にやりと笑うと、明日香や慎太郎達を見た。

「へー、こんな奴にも仲間がいるんだ。しかも、彼女も一緒だとはね」

どこで、知ったのか英二と明日香が恋人同志なのも知っていた。

全員、少し警戒していた。

「じゃあ、仲間達に聞かせてあげようか？英二の正体さあ！」

慎太郎達は、何の事か分からなかった。でも、英二にとっての敵は、みんなにとっての敵だ。

淳は、前に出て言った。

「訳わかんねー事、言ってんじゃねえよ。英二は英二だろ？」

伸二は、また笑うと、喋りだした。

「こいつは、殺人犯だよ。実の母親を、父親と殺したんだぜ。」
全員驚いた。

英二は、知られなくなかったのか、真っ青になっていた。

それを、おもしろそうに伸二は喋り続けた。

「十年前、俺は母親に連れられて、こいつの父親の所へ行った。初めは、気にもしなかったが、ある日家に帰って来ると、母親の無残な姿があった。こいつの父親は隣で自殺していた。その横に、こいつはいたんだ」

明日香達は、言葉が出なかった。

すると、突然慎太郎が前に出てきて伸二を殴った。

「デタラメな事言ってんじゃねえよ！」

てめえが、英二の兄きだからって、言っていていいことと悪い事があるだろ」

その言葉を聞いて、明日香や弥生、淳も英二を守るように出た。
「まっ！その内分かるよ。こいつの本性がな。」

俺は、大切な人を取られた。だから、次は俺が取ってやるよ。そのために、来たんだからな。

英二、殺人犯は死ぬまで殺人犯なんだよ。覚えておくんだな」

伸二は不気味に笑うと、たまり場を出ていった。

「英二、大丈夫だ。俺たちは信じねえよ。お前はお前だからな」
淳は、優しく笑いながら英二の肩に手をかけた。

それをふりほどくように、英二は何も言わずに出て行った。

次の日、英二は学校に来なかった。

たまり場にも来ずに、どこにいるのかさえ分からなかった。

「英二、全然連絡取れないけど大丈夫かな？」

一番心配してるのは明日香だ。

どうすればいいのか分からなかった。

「よし！！」

突然、慎太郎は立ち上がった。

みんな慎太郎を見て、何？みたいな顔をした。

「こんな所で考えても答えは出ない。英二の家に行こう」慎太郎のアイディアで英二の家に行く事にした。

話によると、父方の祖母と二人暮らしだと聞いた。

さっそく、家に着くとチャイムを鳴らした。

「はい」

中から、少し若い声が聞こえた。想像以上に若く聞こえたので驚いた。

一人の女性が出て来た。

「どなた様？」

初めは、何故子供が来たの？みたいな顔をしたが、すぐに英二の友達と分かったらしく優しく笑った。

「あの、英二君の友達なんですけど、英二君はいますか？」

淳が言った。

祖母は、急に黙り込むと静かに首を横にふった。

すると、明日香が

「昨日、英二君の義理の兄が来ました。それで、英二君に殺人犯だとか言つて…お願いします。祖母の方なら、何か知っているはずですよ。本当の事を教えてください」

必死になって言った。

こんなにも、英二が心配なんだなと全員思った。

祖母は、下を向き

「そう、伸二が来たのね。

いいわ。教えてあげる。」

そう言つて、明日香達を中に招いてくれた。

奥にある客間に案内すると、すぐに人数分のお茶とお菓子を用意してくれた。

「ヨイシヨ。」

やはり年のせいかな、動きは鈍く感じた。さっそく、祖母は切り出した。

「一つ聞いていいかな？みんなは、英二が殺人犯だと聞いて、どう思った？」

みんなの様子を伺うかの様な目で見つめた。

「どうも思いません。英二は英二です。今の英二が、私達の英二なんです」

明日香は、真っ先に言った。

他のみんなも、同じ意見だ。

みんなをじつと見ると、祖母は優しく笑った。

「英二は、いい仲間を持ったな。最近、優しい目をしてると思ったら、みんなのおかげだったんだ。」

みんなは、少し照れた。

「よし。じゃあ話すよ。その前に、安心しなさい。英二は殺人犯じ

やないよ。

誰一人として殺してはいないよ」

みんな顔を見合わせると安心した。

「で？じゃあ、英二の父親達が亡くなった理由は？」

慎太郎は、祖母にも悪いと思いつつ聞いた。

「あの日ね、英二の父親と伸二の母親はケンカしてたの。私は止めに入ってたけど、止められなかった。だから、英二を連れて助けを呼びに行こうとしたら、父親は誤って、母親の頭を殴ったの。

私は走って救急車を呼びに行ったわ。でも戻って来たら、父親も自殺していた。何も知らない英二は横で、血まみれになって遊んでた。その様子を伸二は見て勘違いしたんだろうね私が、もっとうっかりしておけば……こんな事にはならなかったのに……」

そう言くと、祖母は涙ぐんだ。

みんなは、真相を突き止めて、安心したと同時に英二が心配になった。

誰も一言も話さずに、英二の家を後にした。

帰り道、慎太郎はゆっくりと喋りだした。

「あいつさ、いつもケンカや酒や女だとかしてんだけど、本当は辛かったんだな。」

みんな下を向き、立ち止まった。

そして、また英二を探しに出かけた。

それぞれ、別れて探してる内に辺りは暗くなって来た。

弥生はお腹に子供がいるんで一足先に帰った。

夜9時になり、明日香は街を探した。

ふと、足を止め英二の事を考えた。

（逢いたい。支えてあげたい）

そう思ってる内に、気が付けば、たまり場へ歩いていた。

何度も来た所なのに今はいそうな気がしたからだ。

ゆっくりドアを開けると、窓からこぼれた月明かりに照らされた英二がいた。

明日香は安心した。同時に泣いた。英二を見つけ安心したからじゃなくて、英二の過去を支えてあげられなかった自分に悔しかったからだ。

「明日香？どうしたんだ？」

優しく明日香の所へ行った。

「英二、バカ。何でいなくなるの。辛いなら分けてよ。」

英二は黙り込み、また後ろを向き言った。

「俺の事で誰にも迷惑かけたくない。俺は平気だ。お前らには関係ねえよ。」

振り返った英二の顔は、笑っていたが、少し寂しい目をしていた。

明日香は、英二の前に行くと、思いつき叩いた。

そして、また泣き出した。

「何で？何でよ。今の英二じゃないよ。」

そんなに、伸二先生が怖い？

そんなに、みんなに迷惑かけるのが怖い？

そんなに、自分の過去が恐いの？」

英二はまだ黙ったままだ。

「伸二先生が怖いなら、一緒に戦えばいいよ。」

誰かに迷惑かけるのが怖いなら、一緒に悩めばいいよ。

過去が怖いなら、一緒に立ち向かえばいいよ。

私の大好きな英二は、そんな男だよ」

明日香は、泣きながら言った。

英二は、そつと明日香を抱きしめた。

「そつだよな。俺には仲間がいる。明日香もいる。バカだな俺。」

明日香は、そつと体を離すと英二にキスをした。

そして、

「過去なんかいいよ。今の英二が英二なんだからさ」

二人は、笑い合った。

そして、ソファーに腰掛けると体を寄り添い合った。

「もうこんな時間だし、ここに泊まるうか？」

明日香は、恥ずかしそうに言った。

そして、イスやテーブルを並べ、ベッドを作り二人で横になった。英二は上を向き、喋りだした。

「俺さ、今まで家族とかわからなかった。父親だけで、あまり家にいなかったからさ。だから、伸二達が来た時は嬉しかったんだ。でも、また家族というもの分らないまま終わっちゃって…」

少し寂しそうな声で英二は話した。

明日香は、英二を抱きしめながら

「私が家族になるよ。だから、もう一人にはしないでね。ずっと一緒にいてね」

二人は見つめ合うと、愛を感じ合った。二人だけの夜を…

2日後、英二は学校に来た。

学校では伸二と話さなかった。

放課後、英二は伸二を呼びつけた。

「何だ？俺も殺そうとするのか？」

相変わらず、伸二は英二に冷たかった。

「あんたには、悪いことをしたと思う。あんたの辛さもわかる。でも、俺には守りたい人がいる。あんたが、そいつらを苦しめるなら俺は戦う。何度でも俺は、あんたを止めてやる」

強い目で言った。

「1人で何が出来るんだ？」

それでも、伸二は笑ってる。

「一人じゃないよ」

後ろから声がして、英二は振り返った。そこには、明日香、弥生、慎太郎と淳がいた。

明日香は、伸二の前に立つと伸二の胸ぐらを掴んだ。

「これ以上、英二を苦しめるなら許さない。私達もいること知っつけ！」

おとなしいはずの明日香が伸二に向かって、怒鳴った。

それには、みんな驚いた。

「はいはい！まっ俺には、どうでもいいことだ。だが、これだけは覚えておけ。俺は、これから英二を許さない。」

そう言くと、伸二は去って行った。

次の日、伸二の姿はなかった。

また転勤したらしい。

みんなは、いつもと同じ日に戻っていた。

「しかし、明日香怖かったな。あんなに切れるなんてさ」
淳が、からかうように言った。

「英二、怒らせない方がいいよ」

弥生も笑いながら言った。

「ああ、絶対に負けるから辞めておく。病院送りになりたくねえかな」

みんな、笑い出した。

英二と明日香は、みんなにバレないように、そっと手をつなぎ合った。

いつまでも、一緒に……

第七章 二人だけで…

英二と明日香、そして弥生と慎太郎、淳。いつもと同じく過ごしていた。

伸二の事件から4ヶ月たっていた。

英二は、いつものように家で明日香と何気ない日々を過ごしていた。「おい！何か楽しい事ないかな？」

明日香に甘えるように英二は寄り添った。

多分、やる事が目的だろう明日香は、そんな英二を好きだった。みんなの前では、強い男でいるが、明日香の前だけでは甘えた英二が見えるからだ。

でも、その日は違った。

「もう！あんまり、くっつかないでよ」

いつもとは違う明日香の態度に英二は戸惑った。

「あっそ」

そう言くと、反対方向を向きスネ始めた。

「ちよっと！子供みたいにすねないでよ。これから大変なんだからさ。」

「ん？」

英二は意味が分からなくなって明日香を見た。

「しょうがないな。驚かないで聞いてよ。実は出来たのよ。」

「ん？」

意味がいまだにわからない英二。

「だから、出来たのよ。子供が。英二と明日香の赤ちゃん。」

何を言ってるのか、すぐには理解が出来なかった。

でも、すぐに笑顔になり明日香を抱きしめた。

「まじ？まじ？」

「うん。まじ！初めは体調不良かと思ったけど、弥生と一緒に病院

に行ったら、3ヶ月目だつてさ」

英二はまた強く明日香を抱きしめた。

「俺、働くよ。無理してでも働く。だから、産もうな」

明日香は、返事と同時に英二を抱きしめ返した。

次の日、さつそく慎太郎や淳にも報告した。

やはり驚いた。でも、幸せそうな顔の二人を見てると喜んだ。

「じゃあ、さつそく親達に挨拶したのか？」

慎太郎が聞くと、肝心な事を忘れていたかのように英二は明日香と顔を合わせた。

「ヤッベ〜。そうだったな」

英二はまだ明日香の親と対面した事がなかった。

さつそく、明日香は親に話したい事があるからと英二と会う約束を取り付けた。

一週間後、その日は来た。

慣れないスーツを来て、明日香と会つとさつそく爆笑された。それもそのはずだ。

いつも、今時の若者という感じの服しか着ない英二が、ビシッとスーツ着てきたからだ。

まあそれぐらい、真面目な証拠だ。

免許を取ったばかりの明日香の運転で家に向かった。

「本当に大丈夫？」

明日香は心配していた。

「まかせておけて」

なぜか自身満々の英二だったが、家の前に着くと、胃が痛くなり緊張してきた。玄関で深く深呼吸をすると、明日香と一緒に中に入った。

一見、普通の二階建ての家だが、英二にとっては、かなり豪邸に見えた。

奥に案内され普通の部屋より少し広めの応接間に行った。

また深呼吸をして、ふすまを開けた。

中には、父親と母親が並んで座ってる。息がつまりそうな空気が流れた。

「失礼します」

おじぎをしながら、父親達の前に座った。

明日香が恥ずかしそうに、英二に手を差し伸べながら

「こつちが、鎌田英二さん。」

英二も照れた。

すると同時に、父親が話しかけた。

「英二君だよな？噂は聞いている。そこら辺では、有名じゃないのか？」

英二と明日香は、何を言ってるのかわからなかった。

父親はさらに続けた。

「恐喝した金で遊んで。女、飲酒、喫煙。盗み等と警察からも一目置いてる。しかも、今は留年してるみたいだな」

英二は本当の事を言われて、黙った。

「ちよつとお父さん！失礼じゃん！いきなり、そんな事言つて。今の英二は変わったんだから。」

明日香は、父親に怒鳴った。英二はすぐに、明日香を止め、正座をした。

「たしかに、俺は周りから見たら悪いことをしてきました。でも、今は明日香と出会って一緒に過ごしてる内に、真面目になる決意です。」

絶対に苦労はかけません。お願いします。結婚させてください」

床に頭を付くように下げた。

「駄目だ」

父親は、厳しい口調で答えた。

明日香も正座した

「お願い。お父さん。お母さん。本気なの。しかも…お腹に子供もいるのよ」

両親は驚いた。

同時に、父親は立ち上がり

「ふざけるな！まだ十代じゃないか？しかも、こんなチャラチャラした奴の子供なんて…絶対に許さん。子供はおろす。」
そう言つて部屋を出た。

母親も黙つたまま出ていった。

明日香の家を出て、二人でたまり場へ行つた。その行く道。

「ごめんな。俺がもつと真面目になつてれば…」

英二は、さすがに落ち込んでいた。

明日香は何も言う事が出来ず黙つたまま歩いた。

たまり場に着くと、慎太郎と淳、弥生がいた。

「どうだった？」

弥生は心配そうに聞いた。

「全然ダメ。話も聞いてもらえなかった」

弥生達はがっかりした。周りに重い空気が流れ、それぞれ何も話さないまま歸つた。

それから一週間後。英二は仕事を探していた。一人街を歩いていると、ばったり明日香の母親と出会つた。

「英二君だつたよね？今いいかな？」

母親と喫茶店に入った。

挨拶に行つたきり、何の変化もないまま出會つて、また重い空気が店内に流れ始めた。

「この前はごめんね。うちの人が怒鳴つたりしてさ。」

この前は、話もしなかった母親は優しい口調で言つた。

英二は少し緊張がほぐれ、笑顔で答えた。

「話しとは？」

英二は、もしかしたらと思ひ聞いた。

「明日香の事なだけどさ、あの子、一人娘だから、うちの人には可愛がつてるの。でも、明日香が決めた人ならつて、前から決めてた。英二君は明日香の事、本当に愛してる？」

英二を確かめるように母親は聞いた。

「もちろんです」

英二は強く言った。

「明日香のためなら何でも出来る？」

「はい！絶対に」

しばらく母親は黙った。

「じゃあ、あの子のために死ねる？」

「はい。明日香のためなら辛い事も出来ます。」

英二の言葉はウソじゃなかった。

また静まり返った母親は、にっこり笑い

「なら、別れて」

英二の周りが一気に静まり返った。

それもそのはずだ。英二は結婚を許してくれると思ったからだ。母親は再びしゃべり出した。

「あの子は私達の宝なの。今が大事な時だつて知ってる。

早く結婚すればするほど辛くなる。親ならば、娘にはしあわせな安心な結婚をして欲しいから。

さつき、明日香のためなら何でもするつて言つたよね？

なら、明日香のために別れてください」

英二は真っ白になった。でも、母親の言う事は当たってる。だから、何も言う事が出来なかった。

「三日間だけ待つわ。」

母親は、そう言うつと出て行った。

途方に暮れながら、英二は明日香と会った。

どこも行く所もなくて、たまり場に向かった。

ドアを開けようとすると、中から声がした。慎太郎と淳だ。

「きっかけ、あの英二が結婚とはね。嬉しいけど…」

「やつぱ、まだ十代だし、親なら反対するよね。オレでもするよ。別れさせるね」

何気に言つた淳と慎太郎の言葉に二人はショックだった。たまり場を後にして、近くの公園のベンチに座った。

二人は黙ったままだった。

明日香は泣きそうな声で聞いた

「十代って結婚しちゃダメなのかな？若いからって、愛し合ったらダメなのかな？」

英二は悔しかった。（もし、若くなかったら。もう少し大人だったら…俺が真面目にしていたら…）二人は、泣きそうな気持ちだった。みんなに祝福されたい。みんなが羨ましがるような結婚したいのに…やりきれない気持ちだ。

英二は、少し考えた。そして、口を開いた。

「明日香、全部捨てる事出来るか？俺たちだけで、どっか行こうか？」

明日香は、少し黙り答えた。

「ここで、みんなに祝福されないなら、英二と二人だけでいたい。」
二人は駆け落ちを決めた。

次の日、朝早くからあるだけの貯金と荷物を持って、二人は電車に乗り行ってしまった。

その日の学校では、英二達がいなくなったのが知れ渡っていた。

もちろん、明日香の両親と英二の祖母は学校に来ていた。

英二と明日香は、全てを捨ててまでも二人でいることを選んでしまった。

第八章 愛の終わり

英二と明日香が駆け落ちをしてから3日たった。

二人は、小さな島に来ていた。

島民も少なくて、小学校と中学校が共同とか、信号が見当たらない。そんな小さな島で自然を楽しむのもいいと思えたのだ。

英二達は知り合いもない場所で、住む場所もないのでホテルを探していたが、こんな小さな島にあるはずがなかった。

悩んでいた所に、小さな赤ちゃんを連れたカップルが声をかけてくれたのだ。

名前は、大原さん。二人も去年に、駆け落ちをして、ここに来たみたいだ。

明日香と英二を見て、自分達と同じような感じがしたので親切にしてくれた。

大原さん達が住んでる家の二階を借りて明日香と英二は暮らした。

また、英二は大原さんの旦那さんの紹介で仕事も見つかった。

英二は、その日いつものように走って帰って来た。

「ただいま」

ドアを開けると、夕飯を作ってる明日香が立っていた。

「おかえり。早くお風呂に入って来て」

明日香は、笑顔で迎えた。

英二は嬉しかった。家に帰ると『おかえり』と言ってくれる人がいる。しかも自分の大切な人だ。

早くお風呂に入り、明日香に抱きついた。

「もう、危ないよ。」

英二は、かなり笑顔だ。バカ面って感じの笑顔だった。

「俺も手伝うよ。一人だったら大変じゃん。しかも、お腹に負担が来たらさ、ヤバイじゃん。」

明日香は、笑顔で

「前から、こんな優しかつたらなあ。」

二人は幸せだった。全てを捨てても、二人でいるなら、他に何もいらなかった。

明日香と英二が幸せに暮らしてる中、英二達の街では大変な事になっていった。

明日香の両親が搜索願いを出していたのだ。

警察も動き出した。慎太郎や淳と弥生にも回って来たが、三人は知らない。

弥生は心配だった。

そんな事も知らずに、英二と明日香は楽しく暮らしていた。夕飯を食べてると、コンコン

ドアを叩く音がした。

開けてみると、大原さんの奥さんの美加さんがいた。

「ごめんね。夕飯中に。お願いがあるんだけどさ……」

二人は、美加さんを中に招いた。

三人で座ると、すぐに美加さんは話した。

「明日さ、うちの子を預かってくれないかな？お腹の子が検診なんだけどさ、上の子がいると集中出来なくて。」

美加さんは二人目を妊娠していた。

今、8ヶ月に入ったみたいだ。かなりお腹も目立ってる。

二人は恩返しのつもりで了解した。

次の日、船で隣の島の病院に行くために美加さんは早くからでかけた。

もちろん、子供は明日香達が預かった。英二は、その日は仕事を休んだ。妊娠中の明日香には大変だと思ったからだ。

「サクラちゃん。プーさんだよ。」

まだ、一歳になったばかりのサクラと明日香は楽しく遊んでいた。

英二は、その隣で……いじけていた。

「ちよつと、サクラちゃんが泣くからって、いじける事ないじゃん」

そう。英二がサクラにただ話かけただけでも泣くのだ。

「俺は怖いのか？」

明日香と楽しそうに笑うサクラを見て、切なさでいっぱいになった。それを見ていた明日香は提案した。

「よし、お昼は三人で、お弁当持ってどこかに行こう」

いじけてる英二は、乗り気じゃなかった。でも渋々行った。三人は島の一番高い所にある公園に行った。

公園に行っても、明日香とサクラは二人だけで遊んでいた。英二はというと、そばにある大きい木の影で、ビールを飲んでいた。

「ちくしょう、また俺は一人かよ」

まだいじけてる英二。

すると、明日香のそばで砂遊びしていたサクラが手招きした。

英二は、ただ遊んでるだろうと思ひ、気にしなかった。

「英二と一緒に遊ぼうだって」

英二は、途端に笑顔になった。

「よっしゃあ、遊びまくるか！」

三人は、子供のように遊んだ。

昼も過ぎ、弁当を食べてるとサクラが英二の膝に座って来た。

「サクラは甘えん坊だな」

鼻の下をのびしながらにやけてる英二。

「絶対に親バカになるね。」

明日香は、英二を見ながら独り言のように言った。

それから、二週間が過ぎた。

明日香と英二がいなくなつて、もうすぐ1ヶ月が立とうとしていた。「ねえ、明日香達まだ連絡来ないのかな？」

弥生は、慎太郎や淳にグチのように言った。

相変わらず、明日香の両親は学校に来たり、警察は搜索して街にも知れ渡つてる。

明日香達はというと、貧乏だか幸せに暮らしていた。

お腹の子供も順調に育っていた。

ある日、ふと明日香はケータイの電源を入れた。久しぶりに弥生と話したかったからだ。

弥生には話そうと思い、ドキドキしながら電話をかけた。

すぐに、弥生は出た。

「もしもし？明日香？どこにいるの？」

「ごめんね。連絡遅くなつて。今は小さな島にいるよ」

明日香は、久しぶりに聞いた親友の声に懐かしさを感じた。だが、同時に不安な事を聞いた。

「バカ！今それどころじゃないよ。明日香のお母さん倒れたのよ」
明日香は、体が震えた。

タイミングよく英二が仕事から帰って来て、事情を説明した。すぐに二人は、大原さん達に連絡して荷物を持ち帰った。

病院に着くと、病室の前に弥生と明日香の父親がいた。

明日香の父親は二人の姿を見ると、突然英二を殴った。

「お前のせいだ。あいつが倒れて」父親はにらみつけた。

「話も聞かずに殴らないでよ。」

明日香が間にはいったが、そのまま病室の中に連れられて行った。

英二は何も言えないまま病院を後にした。

弥生と歩いてると、弥生は英二の前に立ってビンタした

「何で、連絡もくれないの？明日香のお母さんね、朝から夜遅くまで探していたのよ。それで、体壊して…人に迷惑かけるぐらいなら別れたら？」

英二は本当の事を言われて、言い返せなかった。

その夜、一人で考えていた。

（俺たちは間違っていたのか？これで幸せになれるのか？）そう思うと、自分たちがしてきた事が、みんなを不幸にしているとおもってきた。

次の日、久しぶりに学校に行った。

そこでもまだ、悪い事は起きた。

明日香の父親が、学校に訴えて、明日香の高校と英二の高校は合同に臨時の集会が行われていた。

全校生徒の前で、英二の処分を校長先生が話した。集会には、明日香も父親も来ていた。

「えー、皆さんも知ってると思うが、このたび我が高校の生徒が恥じる行為をした。我が先生達は、その事件を受け止め何が生徒のためにいいのか考えた結果、男子生徒を退学とし、女子生徒を一週間の停学とする」

生徒達は、ざわついた。中には、納得いかない生徒もいて会場は騒いだ。

「静かに！えー今回の本人であり、また、我が校の生徒会長でもある鎌田英二君からお詫びの言葉をもらいたい。生徒の模範的な存在となる会長が、退学処分になるなんて…」

一言、謝罪してください」

生徒や先生方、会場にいる全員が英二を見た。

英二は、何も言わずに舞台上上がった。しばらく黙り話した。

「俺は…みんなや周りの人に迷惑をかけました。初めは、二人の事だけを考えていた。迷惑をかけてるつもりもなかった。でも間違ってた。二人の気持ちだけでは生きていけないって気づいた。だから、この処分は当たり前だと思う。」

会場は静まり返って聞いていた。

「でも、俺は…後悔してない。これから、俺は一人の人のために何でもする。初めてなんだ。ケンカや酒やタバコより好きな事を見つけたのは。初めて誰かを守りたいって思ったんだ。

明日香のためなら、俺はどんな罰でも受ける。これからずっと…」

俺は今なら素直に言える。

俺は…明日香を愛してます」

会場は再び騒ぎ出した。

すぐに、先生方出てきて、英二を外に連れ出した。

それを見た明日香も英二を追った。

たまり場に着き、二人は一言も喋らなかった。

突然、明日香は立ち上がり話した。

「ねえ、覚えてる？ここで色んな事があったね。」明日香は、ソファーやテーブルをなでながら話した。

英二は下を向き、何かを考えていた。

明日香の動きが止まり、明日香は泣き崩れた。

「何でかな？私たち、そんな悪い事をしてるの？愛し合ったらダメなの？」英二は、明日香の後ろに立ち、強く拳を握りしめた。

「明日香、俺たちさ…人に迷惑かけてまでも一緒にいたかったのかな？」

英二の頭の中で、前に明日香の母親が言った言葉が蘇った。（明日香のためなら、別れて）

英二は、深呼吸すると、

「明日香…別れよう」

明日香は泣いた。

このままじゃ、一緒にいれないって知っていたけど、現実にはしなくなかった。英二は、そのまま後ろを向き、たまり場を出た。

「英二？英二…」

いくら呼んでも、英二は黙ったままドアを閉めた。

明日香と英二は別れた。

お互いのためにも、周りのためにも…

第9章 小さな結婚式

辛い別れから、1ヶ月たとうとした。

弥生は明日香から聞いていた。

初めの一週間は明日香は暗い顔をして、目が腫れ上がっていた。毎日泣いていたのだろう。

たまり場にも、明日香は行かなかった。また辛くなるからだ。

「明日香、本当にいいの？」

弥生は、そろそろ産まれてくる子供のために靴下を編みながら、何やら明日香に聞いた。

「うん。全然平気。お父さんとお母さんもね、やっとOKしてくれましさ。」

明日香は、一人で子供を産む事に決めていた。

母子家庭は辛い、それが英二との証だからと思ったからだ。

弥生と明日香だけが知っていた。

あの日から、弥生と慎太郎と淳は、英二とは連絡を取ってるが明日香の事は話さなかった。

二人にとって、辛くなるからだ。

もう、明日香も元気に見えるし、周りは気にもしなかった。

「今度さ、みんなでドライブに行こうよ。淳が免許取ったんだって」

弥生は、明日香に提案した。

明日香は淳と慎太郎とは久しぶりに会うので、すぐにOKした。

一週間後、待ち合わせた駅前に、みんな集まった。

淳に慎太郎。それに祐介もいた。明日香は、久しぶりに祐介を見て懐かしく感じた。

五人は少し広い車内に乗り、でかけた。

「弥生と明日香、陣痛来たら言えよう！ここで俺が取り出してあげ

るからな」

慎太郎が、いつものようにからかった。前みたいに、仲間達と過ごす時間は、楽しかった。

でも、明日香は少し寂しさを感じていた。

（ここに英二がいたら…）

そう思っても、顔には出さないように笑ってた。

ドライブしながら、食事したり、海に行ったりして周りが暗くなり、五人は帰った。

その帰り道、ふと信号待ちをしてると、

「最近、道路工事多いな。ここでもしてるよ。」

何気に見た工事現場。

明日香は、目を疑った。

後ろ姿だけど、すぐにわかった。

「英二？」

明日香の言葉と同時に車は動き出した。

「ん？何か言った？」

弥生は気づいていないのか、明日香に聞いた。

「えっ？うつん。何でもない」

明日香は、気のせいだと思った。

英二の行方は、明日香は知らなかった。ケータイも解約されて、学校も退学になり家にも、あまり帰って来ないみたいだ。

どんどん月日がたつに連れ、明日香は不安になった。それでも、みんなの前では明るく振る舞った。

そんな明日香を見て、みんなは、あえて何も言わなかった。

数日後、明日香は祐介に呼ばれ、公園に来ていた。

「話って？」

明日香と祐介は、ドライブに行った日から、前の仲の良い友達にな

っていた。

「あのさ、今さらなんだけど…英二の事まだ好きか？」

久しぶりに英二の名前を聞いて、少し胸が苦しかった。

「何で？」

明日香は、無理矢理笑顔を作り、聞いた。

「俺は、お前達が付き合って、嬉しかった。でも、どっかでは英二を恨んだ。俺も明日香が好きだからな。だから、こんな時になんだけど…俺が幸せにする。子供も俺が面倒見る。俺と結婚しよう」

明日香を強く抱きしめた。

明日香は、驚いた。しばらく、二人は固まった。

祐介が明日香を抱きしめていると、明日香の肩がわずかに震えてるのを気づいた。明日香をゆっくり離すと、明日香は泣いていた。

祐介は確信した。

「ごめん。突然」

祐介は、明日香をベンチに座らせた。

まだ泣き止まない明日香。じぶんでも何で泣いてるのかわからなかった

「ごめんね。何か…色々思い出して…」

祐介君は、いつも優しいけど…それに答えられない。私、まだ…
そう明日香が言うと、祐介は笑った。

「わかってたよ。英二を愛してるんだろ？」

明日香はうなずいた。

二人は何も話さないで帰った。

「ありがとう。送ってくれて」

明日香は家の前で、祐介にお礼を言うと、家の中に入ろうとした。

「明日香！俺は、いつでも見守ってるからな。英二と明日香をな。それと、英二だけど、お前の事ちゃんと想ってるよ。」

そう言うと、祐介は走って帰った。

二日後、明日香はまたみんなと会った。祐介との出来事から、少し

元気がなかった。

その様子はみんな知っていた。

「あの…俺たちさ、明日香に言わなきゃいけない事がある」
淳が話しかけて来た。

明日香はまた笑顔を作り聞いた。

「無理しなくていいからさ。今の明日香見て俺たちも辛いんだ。

英二さ…今バイトしてる。昼間は、ビルの掃除で夜は工事現場にいるよ。何でだと思う？」

明日香は、わからなかった

「それはな、お前のためだ。今は、まだ1人前になってないと思つてさ、あいつ…毎日働いて、明日香の親に認めてもらえるように頑張ってる。

あいつバカだからさ、そんな事しても意味ないと言つても聞かないんだ。俺が、したいようにするってさ。

まじ、バカだよな。でも、かっこいいな。昔のあいつからは考えられないよ。

たった一人の女のために、体がボロボロでも頑張るなんてさ。

英二はまだ、明日香を愛してるんだ。

しっかり働いて、周りから認められたら、また明日香に告白するって言つてさ。だから、明日香。

待つてあげなよ。今は、俺たちの前で泣いてもいいからさ。あいつの事、想つててくれ」

初めて知った。

英二が自分のために働いていたなんて…

明日香は泣いた。声をあげ泣いた。

「わかった。私もまだ愛してるよ。今もこれから、ずっと」

明日香は、待つことを決めた。何日かかるかは分からない。

でも、英二はきつと来る。

明日香は待ち続けた。

それから一週間。

明日香は、お腹の子供も順調に育ち英二と会う日まで、明るく元気になっていた。

周りも気を使いながらも、楽しくしていた。

家で、母親といた明日香に電話が鳴った。

「明日香か？急いで病院に来てくれ、英二が倒れたんだ。」

電話の主は慎太郎だった。

明日香は、しばらく何を言ってるのかわからなかった。

でも、英二と言う名前に思わず

「英二が？」

と叫んでしまった。無意識の内に、家を飛び出そうとした。その瞬間、玄関のドアが開いた。

立っていたのは、父親だった。

「どこに行くんだ？さっき聞こえたぞ！あの男の所に行くのか？」

明日香は、父親の言葉を無視して出ようとしたが、腕を捕まえられてしまった。

「離してよ！英二が倒れたのよ！」

必死で父親の手を離そうとするが、強く握られているために離れない。

「あいつは、お前を捨てたじゃないか？あいつの所に行ったら不幸になるぞ。」

明日香！お前のためだ。あいつとは関わるな。」

明日香は、抵抗を止め、下を向き言った。

「たしかに、お父さんやお母さんの言うとおりだよ。英二は、世間から見たら、悪い事ばかりしてる。」

でも、それでも愛してるの。英二は私を捨ててなんかいない。不幸にもならないって信じてる。

私は、英二を愛してるのよ！」

そう言つて、力が弱まった父親の手を振りほどき出て行つた。父親と母親は、ただ立ち尽くすしかなかった。

明日香はタクシーを見つけ、病院へと急いだ。

病院に着くと、すぐに弥生がいた。

「弥生、英二は？」

弥生に聞いても、弥生は黙つたままだつた。

弥生は、英二の病室を指さすと、明日香は走つた。

（どんな形でもいいから逢いたい…）

そう思いながら、病室のドアを開けた。ドアを開けた瞬間、明日香は言葉が出なかった。

病室には、淳と慎太郎と英二のおばあちゃんがいた。

そしてベットには…リンゴを丸かじりしてる英二の姿があつた。

「明日香？」

英二は突然の姿に驚いた。

「えっ？英二？平気なの？」

明日香は、力が抜けその場に座つた。

慎太郎が、寄つてきて、英二の隣のイスに座らせられた。

「まあまあ、あとはお前らで話せよ。」

淳が言つと、みんな出ていった。

病室の中は、しばらく気まずい空気が流れた。

二人とも、久しぶりに会い、何を言つていいのかわからなかった。

突然、明日香は今までの事や、英二の無事を安心して涙が出た。

「英二のバカ！何で…何でよ。そんなになるまで、働いて…心配するじゃないよ。」

明日香は、英二の手を握りしめ泣いた。英二は体を起こし、明日香を抱きしめた。

「ごめんな。心配かけて…俺、明日香にひどいこと言ったからさ。だから、次に会うときには、しっかりと真面目になって変わった俺を見せたくてさ。」

英二のぬくもりを感じながら明日香は、「バカ。変わらないでよ。私は、そのままの鎌田英二が好きなのよ！だから、変わらないで。ずっと一緒にいて…」

また明日香を強くだきしめると、英二は枕下から小さな箱を出した。「本当は、もっとロマンチックにしたかったけどさ。やっぱり俺の趣味じゃないや」

そう言っただしたのは、指輪だった。

宝石もついてない、シンプルな指輪だ。明日香の指にはめると、強く抱きしめ言った。

「俺はもう、何もいらなから…ずっと一緒にいるから…」

だから、結婚しよう。お父さん達にも絶対にゆるしてもらおう。」

明日香は、泣いた。そして、小さくうなずいた。

すると、病室のドアが開き、そこには明日香の父親と母親がいた。

「お父さん、お母さん。ゴメンナサイ。私…やっぱり…」

そう明日香がいかけると、父親は黙って明日香を抱いた。

「小さい頃からさ、お前は俺たちの誇りだった。言うことも聞いて、俺たちの望み通りに育ってくれた。

初めてだな。お前が俺たちの言うことを無視したのは。」

父親の目から涙がこぼれた。

母親も、英二の前に立つと、頭を下げた。

「私達は、もう少しで明日香を不幸にするところでした。

明日香は、幸せだ。どうか明日香をお願いします」

英二は、頭を下げ

「絶対に幸せにします。明日香も明日香の周りの人も。明日香に関わるもの全てを大切にします」

父親も英二を見て、

「一人娘だ。何かあつたら、許さないからな」と笑顔で言つた。

こうして、明日香と英二は、婚約した。いつまでも、ずっと…

一週間後。英二は退院した。

外に出て、迎えに来た祖母と歩いていた。

「ん。やっぱ外はいいなあ」

背伸びをしながら、迎えに来るはずの明日香が来ない事を気にしていた。

病院の門を出ると、淳の車が止まっていた。

「英二！早く乗れ！行くぞ！」

（迎えに来たんだな）

と思いつつ、車に乗り込んだ。

しばらく走っていると、車は英二の家とは逆方向へ向かつてる事に気づいた。

「おい、どこに行くんだ？家とは逆だぞ」

英二の質問にも答えず、淳は車を走らせた。

またしばらく走ると、次は、教会に着いた。

すると、車を止め英二に降りるように指示すると、淳は奥の部屋へと案内した。ワケも分からず、淳と一緒に歩いた。

奥の部屋に着くと、

「何も聞かずに、これに着替える」

そう言われ、渡された物はタキシードスーツだった。

ますます、意味がわからなくなって来た。

そして、着替え終わると目隠しされ、どっかへつれて行かれた。

「よし、いいぞ。目隠し取っても。」

恐る恐る、目隠しを取ると、急に明るくなり英二は、驚いた。

そこは、教会の中でみんながいる。

淳に慎太郎。弥生と弥生のお母さん。英二の祖母に祐介と明日香のお母さんとお父さん。

英二や明日香に関わる人がいた。

そして、奥にある十字架の下には、ウエディングドレスを着た明日香がいた。

「何だ？これは？」

まだ状況が分からず、英二は立ち尽くした。

「英二と明日香の結婚式だよ」

弥生はピースをしながら言った。

「何だかんだ言ってさ、みんな二人を祝福したいからさ」

淳もピースをしながら言った。

英二は少し照れながら、明日香の元へ歩いた。

間近で見ると、いつもの明日香じゃなく、キレイすぎて英二は唾を飲んだ。

「どう？惚れ直した？」

恥ずかしそうに、明日香は聞いた。

「キレイだ」

思わず口にしてしまった。照れながら、英二は横を向いた。

「よし、おっ始めるか」

祐介が神父姿で二人の前に立った。

正式な儀式じゃないけれど、大切な仲間が祝ってくれる結婚式は嬉しかった。

「えゝ、では、最後に定番のキスをしてもらいましょうか」

祐介が言くと、会場は盛り上がった。

初めは、照れていた英二も見せびらかしながら、明日香と誓いのキスをした。

いつまでも、この幸せが続くように…

第10章 幸せ

ばっちゅん!!

いきなり、英二の部屋からすごい音が聞こえた。

「いつてえ」

英二は赤くなつた頬を触つた。その瞬間、また一つのビンタが飛んできた。

ばっちゅん!!

「いい加減にしろ! てめえ」

英二は誰かに怒鳴つた。

その相手は明日香だ。

みんなが祝つてくれた結婚式から何ヶ月か経ち、周りは、色々と変わっていた。弥生も無事に元気な女の子を産み、なんと慎太郎と結婚した。

淳は、彼女が出来毎日楽しく過ごしていた。

祐介は、学校を辞め今は、アメリカに行き音楽を勉強している。

明日香も、お腹が目立ってきていた。

しかし、変わらない人は英二だけだった。

なぜ、今こんな修羅場が起きているかと言うと、先週、仕事の付き合いで飲みに行った英二は、その日に出会った女の子とキスをしている写真を、明日香に見つけたのだ。

「マジで最低! もうすぐ、子供も産まれて籍もいれようとしてる人がいるのに……」

明日香は、半ベソになりながらも英二を睨んだ。

明日香と英二は、子供が産まれて、出生届を出す時に一緒に婚姻届

を出す決めていた。

「もう勝手にすれば？」

明日香は、怒って部屋を飛び出した。

「何だよ。くそっ」

英二は悪いと思いつつ、逆ギレしていた。

ムシャクシャしている自分にもイライラして、英二はその日、ケイを呼び出し飲んだ。

「…ってなわけよ。俺も悪いけどよ、二発もマジで殴る事ねえ〜んじゃねえか？」

愚痴をこぼしていると、ケイは提案した。

「ならよ。息抜きしねえか？実は、前に付き合っていた女が飲もうって言うてるんだ。どうだ？」

英二は、少し戸惑ったが、今日の明日香の態度を思い出し、行く事にした。

（こうなったら、とことん遊んでやる）その頃、明日香は実家の部屋で今までの事を思い出していた。

（変わらないでって言ったけど、この事だけは変わってほしいな。）

少し自分を落ち着かせ、

（起こりすぎたかな？）

と反省した。

そして次の日。

英二は久しぶりに、かつこつけてケイが誘ってくれた合コンに出かける用意をしていた。

突然電話が鳴った。この着信音は明日香だ。

「おう。何だよ」

嬉しかったが、言葉が出ず、切れた口調で言った。

「あのさ…やっぱり怒ってる？」

明日香は恐る恐る聞いた。

「別に……」

気持ちとは裏腹に、冷たい言葉で返してしまった。

「ゴメンね。怒りすぎた。」

泣きそうな声で誤った。

英二も、俺が悪いと思い、謝った。

「俺もごめんなあ。」

二人は電話越しに、笑い合った。

「そうだ。仲直りの祝いにさ、今日、二人でお祝いしようよ」
いつもの明日香の、あどけない声が聞こえた。

しかし、英二は今日ケイと約束がある。今更、断ったら悪い。

「ごめん。今日ケイと飲む約束したんだ。それが終わってからなら

……」

「うん。じゃあ、たまり場で待ってるね。」

二人は、約束して電話を切った。

そして、英二は合コンに行き、昔なら楽しく飲んでいたが、今は明日香が気になった。

一時間もしない内に、明日香に会いたくなった。

「ごめん。やっぱ帰るわ」

そう言つて、急いでお店を出た。

街を歩いていると、英二は一件のお店をみつけた。

ショーウィンドウに、虹色の模様がある写真立てが飾ってある。

（これに、家族写真を入れるか）

英二は、明日香に見せたくて買った。

そして、笑顔で歩いていると、突然、電話が鳴った。

着信 弥生

（何だよ？）

なぜか、電話を取ろうとすると、手が震えた。

「おう、どうしたんだ？」

胸が苦しいほどに、ドキドキした。

「英二、どこにいるの？お願い、早く病院に来て。明日香が…」
明日香の名前を聞いた途端に、無意識に走った。

病院に着くと、淳に慎太郎と弥生、明日香のお母さん、お父さんがいた。

英二は言葉が出なかった。

なぜなら、みんな声をあげ泣いていたからだ。

「おい、明日香は？」

やっと出た言葉を切り裂くように、淳は英二に近寄り、思いつきり殴った。

「てめえ、いったいどこで何をしていた？明日香は…」

そう黙ると、また泣き出した。

そして、一つの部屋に指差した。

真っ先に英二は、その部屋に入った。

中を見た瞬間に、手に持っていた写真立てを落とした。

中には、笑顔で寝ている明日香がいた。

「おい、何してるんだ？ここじゃないだろう？約束した場所はよあ。おい、早く目を覚ませよ。まだお祝いしてないじゃんかよ。約束したじゃねえかよ。」

明日香…明日香…」

いくら、体を揺さぶっても名前を呼んでも、明日香は動かなかった。

ゆっくりと、慎太郎が近寄ってきた。

「英二…車と正面衝突だつて…運ばれた時は意識はあつたけど…お前が来る前に…」

英二は、それでも寝ている明日香を抱きしめながら、名前を呼び続けた。

静かな部屋に、英二の声が響いた…

あれから、1ヶ月後。

明日香の葬式も終わり、周りは変わらない毎日に戻りつつあった。

「英二は、まだ来ないんだ」

明日香の部屋で荷物を整理しながら弥生は言った。

明日香の死から、英二は部屋から出て来なかった。葬式にも顔を出さずに

明日香のお母さんとお父さんと一緒に、深いため息を吐いた。

「英二君も辛いんだ。今はそつとしておこう。」

英二の事をみんなは心配していた。

その頃、淳や慎太郎も同じ事を考えていた。

「このままなら、だめだよな。何とか英二には、立ち直ってくれないとな。」

二人は、何やら相談して弥生にも連絡して、英二の家へと行った。

「どうしたの？みんなで」

英二の祖母がでてきた。

「英二と話させてください」

「…あの子、全然話しないわよ？」

それでも、三人は、英二の部屋へと行った。

無理矢理、開けると三人は言葉を失った。

昔は、恐れられたり、かつこいと言われた男が無残な姿になって

いたからだ。ヒゲは伸び、髪もボサボサ。目は生きているのかわからなかった。

淳は拳に握りしめ、英二に近寄った。

「英二、大丈夫か？」

話しかけても、返事は来なかった。

「一緒に墓参りに行こうよ。」

弥生は、泣きそうになりながらも言った。

「もう、いいよ。疲れた。」

しかし、返って来た言葉で黙った！

三人は諦めなかった。

このままじゃ、英二がダメになる。

そう思い、意を決した。

「ちよつと来い」

無理矢理、部屋から出し車に詰め込んだ。

向かった先は、明日香の墓だった。

英二はまだ、死んだような目をしていた。

「よく見る。明日香だ。現実を受け止めやがれ」

慎太郎は厳しく言った。

弥生は、そつと明日香の墓の前に座り、英二に言った。

「明日香さ、最後に言っていたけど、英二に出会ってよかったってさ。」

あの子変わったな。小さい頃から、おとなしくて、あまり笑わなかったのに、英二と出会ってからは幸せそうだったよ。

英二、人ってさ、何が幸せかな？

私が思うのはさ、人は愛されて愛しても幸せなんじゃない。人の幸

せは、一生に一度だけ、誰かを守りたいって思った時だと思うよ。

愛されて愛して、守りたい人に出会った時が、一番幸せなんだよ。

明日香、幸せだったよ。英二がいてさ」

その言葉を聞いた瞬間に英二は泣き崩れた。

声をあげ泣き崩れた。

最愛の人に

「ありがとう」

と言ったために…

それから、五年が過ぎた。

「ママ、早く」

無邪気な笑顔の子供がいる。

「利香、そんな急いでも開いてないよ」

一人の女性と男性が暖かく女の子を見ていた。
しばらく歩くと、一つのお店に着いた。

「久しぶりだね。ここが、たまり場だなんてさ」

この二人は、懐かしく感じながら中に入った。

中には、三人の男性が座ってた。

「遅いぞ。もう始めるぞ」

「そうだよ。大将が今料理作っているからね」

そうすると、中から一人の男性が出て来た。

「うつせよ。これ飲んで待ってる」

一つのビンを出した。

「俺様特製の焼酎だ。名前は明日香」

みんなは、笑顔で焼酎を開けた。

「しかし、ここを居酒屋にするとはね。英二もやるね」

女性は言った。

明日香の死から五年が経ち、街も周りも変わっていった。

弥生と慎太郎は、子育てに忙しく。淳とケイは、相変わらず彼女を

さがしている。

祐介は日本に帰ってきて、今は婚約者もいるそうだ。

英二はというと、みんなで過ごした、たまり場を借りて居酒屋を始めた。

「しかし、こうして集まるなんて何年ぶりだ？」

淳が言った。

「みんな、揃ったし始めようぜ」

英二は、そう言うのと奥から一枚の写真立てを出した。

それは、五年前に買った写真立てだ。

写真立てには、明日香の写真が飾ってある。

みんなは、それを見て笑いかけた。

大人になっても変わらない仲間と一緒に…

その夜、みんな英二のお店に泊まった。寝息を立ててる仲間を見ながら英二は

「ったく、いつになっても変わらねえな」

と微笑んだ。

そして、夜空を見上げると、つぶやいた

「なあ、お前も見てるか？オレらの事さ。幸せだろ？」

そして、立ち上がり、

「さうで、明日の準備でもしようかね。なあ明日香」

と、居酒屋の方へ向かった。幸せそうな顔で

君がくれた笑顔…

君がくれた愛…

君がくれたぬくもり…

君がくれた仲間達…

そして、君がくれた今の俺…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5639a/>

きみがくれた...

2010年10月27日14時16分発行